

降臨節第3主日

2010/12/12

聖マタイによる福音書第11章2節-11節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

先週は、洗礼者ヨハネが荒野に現れて、「悔い改めよ、天の国は近づいた」と人々に徹底した悔い改めを求める説教をし、洗礼を授け、主の道を整え、主イエスさまの登場に備えた物語を読みました。その物語を通して、わたしたちもどのようにしてイエスさまをお迎えする準備をしたらよいかを学びました。

その続きの箇所では、イエスさまがヨハネのもとにやってきて、ヨハネから洗礼を受ける物語が描かれています。ヨハネは、「それは逆です。自分こそがイエスさまから洗礼を受けるべきです」と言って、イエスさまを思いとどませようとした。

しかし、イエスさまは、それが神さまの御心に添うことだとヨハネを説得して、彼から洗礼を受けるのです。その時、聖霊が鳩の姿でイエスさまの上に降り、天からの声が「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言って、イエスさまこそ神さまの愛する子、救い主であることを宣言しました。その後、イエスさまは荒野に行き、四十日四十夜、悪魔の誘惑を受け、ご自分の宣教の開始に備えます。

他方、洗礼者ヨハネは、領主ヘロデの結婚問題について、厳しく批判をしたために、ヘロデに捕らえられて、死海の東にあるマケルス要塞に幽閉されてしまいます。イエスさまの宣教は、このヨハネの逮捕を切っ掛けとして、ガリラヤ地方で開始されました。イエスさまの宣教の第一声は、ヨハネと全く同じ言葉、「悔い改めよ、天の国は近づいた」で始められました。

牢の中のヨハネは、イエスさまの活動の開始を首を長くして待っていたに違いないありません。何故なら、メシアが登場した暁には、神さまの敵はすべて滅ぼされ、神の民イスラエルが再建される時がやって来ると期待したからです。その時には、神さまの義に忠実を尽くしたが故に捕らわれて、試練の中にある者は解き放たれるであろうという、ヨハネ個人の希望も実現されると確信していたことでしょう。

しかし、その期待がなかなか現実とならないのです。ヨハネは遂に自分の弟子たちをイエスさまのもとに遣わして尋ねることにしました。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」この問いには、ヨハネの困惑と動揺が見て取れるのではないのでしょうか。

「わたしの後から来られる方は、わたしより優れておられる。わたしはその履き物をお脱がせする値打ちもない」と証して、イエスさまを指し示したヨハネです。イエスさまの洗礼に際して、聖霊が降るのを見、更に「わたしの愛する子」という天からの声を聞いて、この方こそ期待を持って待ち望んだメシアであると確信したヨハネです。どうして、その確信が揺らぐようなことが起こるのでしょうか。どうして、ヨハネの心の中に疑いが生じたのでしょうか。

わたしたちも長い間、信仰生活を送っていると、ある時、何かの拍子で信仰が揺らぐことを経験することがあります。それは例えば、信頼し尊敬していた信仰の先輩が、突然

回心して、ほかの教会へと移ってしまった、そんなことが起きたときです。同じ信仰に生きてきたと思っていたのに、その先輩は、自分とは違う思いを心の中に秘めていたことが急に明らかになって、ショックを受けるのです。

ジュリアン・グリーンというフランスで生まれ育ったアメリカ人の作家がいます。聖公会の信仰を持った家庭に育ちました。特に母親は、熱心な聖公会の信仰を抱いており、家族も同じ信仰の道を歩むことを望んでいましたが、彼が14歳の時に亡くなりました。その直後、父親はカトリックに回心したのです。でも、そのことを秘密にして誰にも言いませんでした。その理由は、家族のだれにも動揺を与えないためでした。

ジュリアン・グリーン自信も、やはりカトリックに移った姉の影響や、父が隠し持っていたカトリックの教えを書いた本を読んで、16歳でカトリックになります。それは当時のカトリック教会の教え、特にミサをただ単にキリストの記念として行うのではなく、そこではキリストの犠牲が捧げられるという捉え方を熱狂的に受け入れたからです。

ところが、時代がずっと下って第2ヴァチカン公会議の結果、教会が刷新され近代化されていく中で、彼が大切にしていた教会の信仰が揺らいでいるのではないかと、不安と割り切れない思いを抱くのです。教会が、自分の思いとは大きく違ってしまったことに困惑を抱くようになるのです。(『終末を前にして』)

ヨハネは、自分の後から来られるメシアは、「麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き尽くす」方だと確信していました。正義と不義を非情なまでの峻厳さをもって区別し、審きを行われる方が、ヨハネの期待したメシア像です。それに対して、イエスさまの活動は余りにも違いがあることに、ヨハネはメシアとして受け入れがたいと感じたのです。

ヨハネの弟子の問いかけに、イエスさまは「見聞きしていることをヨハネに告げなさい」と応えています。直接、ご自分がメシアであるか否かと回答するのではなく、旧約聖書の預言を引用して、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を聞かされている」と、間接的にお答えになりました。イエスさまの行っておられることは、メシアが来られるときに起こるしるしであることを告げられたのです。

しかし、ヨハネにとっては、言葉で愛を説き、罪人を赦し、病人を癒すことなどは、生ぬるく弱々しいものでしかありませんでした。この世にはびこっている悪の支配に終止符を打って神の国を樹立するためには、それを凌駕する神さまの圧倒的な力によるほかないと、信じていたのです。

ところで先の国会で、官房長官が自衛隊を「暴力装置」と言って物議を醸し、直ぐ取り消して謝罪するハプニングがありました。現代において、警察や軍隊のような物理的強制力だけに頼って安定した国際関係を保とうとしたり、国内における政治権力を保持し治安を維持することなどは不可能であることは明かです。普段から粘り強い外交努力が積み重ねられて、初めて国家間のより良い関係が持続できるのです。国民の同意と支持を勝ち取るところに政権が成り立つのです。現実の政治において、物理的強制力は最後の切り札でなければなりません。その最

後の切り札をたびたび行使するようになっては、その政権は直に崩壊するであろうことは火を見るよりも明らかです。「剣を取るものは皆、剣で滅びる」のです(26:52)。

イエスさまはヨハネの弟子に、「わたしにつまずかない人は幸いである」と言われました。この御言葉を、「わたしのことで怒らない者は、祝福されている」と訳している聖書があります(詳訳聖書)。イエスさまにつまずくということは、イエスさまのことで怒り出すとことだということです。

何故、怒るのか。こんなはずじゃなかったと思うからです。メシアが来たら悪が一掃されて、神さまの正義が実現されるはずではなかったのか。それなのに、相変わらず世の中は不正が横行し、悪賢い者が甘い汁を吸っているではないか。正しい人が苦しまなければならない現実は変わっていないではないか。イエスなど何の役にも立たない。イエスに従って来たことは間違いだった。そう言って怒るのです。自分の意に合わないメシアなどは、メシアの名に値しない、そう言って人々はイエスさまを十字架につけたのです。

イエスさまの歩まれた道は無力な道です。力による解決ではありません。もし、神さまが力をもって審きを開始されたならば、その審きに耐えうる人が一人でもいるでしょうか。自分を神さまの前に正しい者として誇ることの出来る人が、どこにいるでしょうか。もしいるとすれば、それはヨハネだけです。神さまの義に真っ直ぐに立って、毫も曲げることはしませんでした。風にそよぐ葦のように、あっちだと言われればあっちを向き、別の声がこっちだと呼びかければこっちになびくなどとうことは、いささかもありませんでした。しかしヨハネに欠けたことがあったとすれば、それは、どんな人間であろうとも滅びることは神さまの御心ではない、そのためにメシアは来られたということを知らなかったことです(18:14)。

イエスさまはヨハネを指して、預言者以上の者、女から生まれた者のうちで最も偉大な者だと最大級の褒め言葉を贈っています。しかし、また、天の国で最も小さな者でもヨハネより偉大だと、驚くべき言葉を述べています。天の国に生きる小さな者、それは神さまの憐れみを信じて寄りすがる者のことです。自分に誇るものが何もないことを知って、ただひたすら神さまの赦しの中でのみ、生きようとする人のことです。言い換えれば、主に頼る人です。主の愛に希望をつなぐ人です。このような人が、ヨハネより偉大だと言って下さるのです。

クリスマスは主の愛が現れた出来事です。愛の主が御子をわたしたちのためにお与えくださった出来事です。その愛の到来を待ち望み、ご降誕を迎える備えと致したいと思えます。